1920年代から30年代初頭のソ連における マルクス主義歴史家の論争

——非ロシア諸民族史を中心に——

立 石 洋 子

(北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員)

Discussion of Soviet Marxist Historians about non-Russian Peoples in the 1920s to early 1930s

TATEISHI, Yoko

Research Fellow, Slavic Research Center, Hokkaido University

Abstract

The paper discusses the controversies on the history of non-Russian peoples in the USSR among the Soviet Marxist historians in the 1920s to early 1930s.

The development of early Marxist historical science in the USSR was closely related with the policies of the party. The party leaders distinguished the nationalism of the oppressing nations from that of the oppressed nations, and considered “great power chauvinism,” or Russian nationalism, the main danger. Accordingly, the study of all the peoples in the USSR and the improvement of their cultural level became an important task for scholars, including historians.

At the first convention of the All-Union Society of Marxist Historians in December 1928 to January 1929, the study of the history of the peoples in the USSR was declared as the main task of Soviet historians. For the first time, the historians faced the problem of how to interpret the history of non-Russian peoples from the Marxist perspective.

One main arguing theme was the evaluation of the Russian rule over the non-Russian peoples. Another main problem was the tendency of “the great power chauvinism” of the Russian Marxist historians; this issue was raised by Ukrainian Marxist historians, including M. Iavorskii. They criticized some Russian Marxist historians for underestimating the Ukrainian elements in the history of the revolutionary movement in Ukraine and for not acknowledging the independent features of the cultural, social, and economic history of Ukraine. However, M. Pokrovskii, the most authoritative Russian Marxist historian, did not accept the criticism, and thus, the historians never reached a consensus. In contrast, the problems that became serious themes in the Stalin period, such as the evaluation of the Khan who led the rebellion of non-Russian peoples against Russia, or the evaluation of the “Holy war” by the Muslim population against Russian rule, were given less attention by the historians.

Keywords: USSR, historical science, historical image, national identity

At the end of 1929, when “the cultural revolution” began, not only did the non-Marxist intellectuals receive criticism, but the debate among the Marxist historians became strained. In Ukraine, the criticism against Ukrainian nationalism caused mass political oppression, and the most famous non-Marxist historian, M. Khlshevskii, and Marxist historian, M. Iavorskii, were both arrested. The class factor was put forward in the historical interpretation and this change was reflected also in the study of non-Russian history. The leaders of rebellions against Russia in nineteenth-century Kazakhstan and the North Caucasus and of the rebellion against Poland in seventeenth-century Ukraine came to be evaluated as repressors of the masses, and their dissatisfaction against the ruling classes was considered to be a driving force of these rebellions.

In the Stalin period, historians tried to reevaluate the tradition and the leaders of each people and again faced the problem of the harmonization of the class elements and the national character of each people. This problem remained unsolved from the 1920s. Thus, in the discussion of the early Soviet period, we can see the roots of the fierce discussion among the historians and politicians of the Stalin period.

は じ め に

本稿は1920年代から30年代前半におけるソ連のマルクス主義歴史家の議論を、非ロシア諸民族史の描写を中心に検討する。ソ連の自国史像の変遷はすでに多くの研究者の注目を集めてきたが、その多くは1930–40年代かペレストロイカ期以降を検討対象としており、ソ連初期とその後の時代の議論の関連はいまだ明らかにされていない。

初期のソ連歴史学を分析した先行研究には、ロシアの非マルクス主義歴史家の動向を検討した土肥とシードロヴァの著作があり、特に1928–31年のいわゆる「文化革命」期（この概念については第3節を参照）の歴史学については、エンティーンやバーバーの研究がある。またロシア帝国による非ロシア諸民族の統治の評価については、ティレットが当時の出版物の議論を包括的に分析している⁽¹⁾。近年の研究としては、「ロシア民族国家」の評価をめぐるスターリン期の歴史家の議論を分析したユルガノフの著作があり、その前提となる1920年代から30年代初頭の論争にも言及している⁽²⁾。非ロシア諸民族史についてはプローヒが、ウクライナを代表する政治家であり歴史家であるM.C.フルシェフスキーの生涯を検討し、1920年代のウクライナとモスクワのマルクス主義歴史家の論争を紹介している⁽³⁾。

これらの先行研究はそれぞれに重要な視座を提示しているが、エンティーンやバーバーの研究は革命史と共産党史の変化を分析対象としており、当時の自国史像の変化はいまだ明らかにされていない。また土肥とシードロヴァの研究は非マルクス主義歴史家の動向を中心に検討しているため、同時期のマルクス主義歴史家の議論を検討することで、歴史学全体の動向を明らかにする必要があると思われる。ユルガノフやティレット、プローヒの研究はロシア史あるいは非ロシア諸民族史の描写をアルヒーフ史料に依拠して詳細に分析したが、当時の歴史家や

⁽¹⁾ 土肥 2000, Сидорова 2003, Enteen 1978, バーバー 1996, Tillet 1969

⁽²⁾ Юрганов 2011, 32–99. ユルガノフが検討対象とした「ロシア民族国家」をめぐる議論とは、階級ではなく民族の観点に着目してロシア国家の形成と発展の過程を研究しようとする発想を指す。Юрганов 2011, 15

⁽³⁾ Plokhyy 2005

党指導部が「階級」や「民族」といった概念を通して諸民族の歴史をいかに整合的に解釈し、それらを組み合わせようとしたのかという問題は十分に検討されていない。

さらに東洋学や民族学の分野では、帝政期から活躍する民族学者や東洋学者とソヴェト政権との関わりが明らかにされつつあるが⁽⁴⁾、歴史学の分野では、ソ連初期の自国史研究が後の時代に与えた影響は十分に明らかにされていない。スターリン期を対象とした近年の研究は、ロシア帝国史や非ロシア諸民族史の描写に関する政治指導部の指示が首尾一貫したものではなく、様々な揺れをはらんでいたこと、またそれを受けた歴史家の議論も決して一枚岩ではなかったことに注目しているが⁽⁵⁾、これらの研究は主に当時のソ連内外の情勢からスターリン期の自国史像の変化を説明しており、ソ連初期の議論との関連は検討されていない。他方でソ連初期を検討対象とした先行研究の多くは、1920年代末の歴史学への政治的批判の高まりに着目し、ソ連初期と1920年代末以降との断絶の側面を強調する傾向がある⁽⁶⁾。しかし、スターリン期の歴史家たちの多くがすでに帝政末期、あるいはソ連初期から研究教育活動を行い、また党指導者の多くも初期から民族政策の形成に携わっていたことを考慮すれば、革命と内戦の混乱を経て新たな国家が形成されるなかで、彼らが自国史像をいかに構築しようとしたのかという問題を明らかにすることは、その後のソ連における自国史像をめぐる論争の展開を分析するうえでも必要不可欠だと考えられる。

そこで本稿は1920年代から30年代前半の歴史家の議論を、ロシア史と非ロシア諸民族史の関係、ロシアによる非ロシア諸民族の統治に関する論争に着目して分析し、スターリン期の自国史像をめぐる論争の前提状況を明らかにすることを課題とする。

1. 非ロシア諸民族史研究のはじまり

ソ連初期の歴史研究は、党と政府の民族政策と密接な関連性を持ちながら展開した。初期の民族政策を分析したスリョースキンによれば、当時の公式見解では支配民族の民族主義と被支配民族の民族主義が区別され、被支配民族の民族主義は許容すべきだと考えられた。各地域の被支配民族の後進性を解消し、支配民族に対する不信を取り除くには階級に基づくアフーマティヴ・アクションだけでは不十分であり、被支配民族は階級にかかわらず民族全体をアフーマティヴ・アクションの対象とするべきだとされた。この背景には、後進的民族はプロレタリアートの階級分化が進んでいないため、帝国主義の下では被支配民族を西欧の労働者階級と同一視すべきだという発想があった。このような見解をもとに、各地で従属的地位に置かれた民族の文化と教育水準の向上が目指され、学校や新聞、文化機関の創設とともに全ての民族の歴史研究が課題となった⁽⁷⁾。

スターリンは1910年代初頭に書いた論文の中で、民族運動が「『全人民的』特徴」を持つかのように見えたとしても、実際に利益を得るのはブルジョアジーにすぎないと述べたが、だか

⁽⁴⁾ ソ連初期の東洋学、民族学を分析した近年の研究には、Kemper and Conerman 2011 がある。またカガノヴィチは、帝政末期からソ連初期にかけて科学アカデミーを率いた東洋学者 C.Ф. オリデンブルグの生涯を検討している（Каганович 2006）。

⁽⁵⁾ スターリン期の自国史像に関する政策の揺れを強調した近年の研究には、Brandenberger 2002, Yekelchik 2004, 立石 2011 などがある。

⁽⁶⁾ その一例としては、Kemper 2009

⁽⁷⁾ Slezkina 1994, 418–434

らといて、プロレタリアートが民族的抑圧と闘ってはならないというわけではないと主張した。スターリンによれば、民族的抑圧はプロレタリアートの精神力の発展を妨げており、例えば集会や講義で母語の利用を禁止され、学校が閉鎖された状態で、タタール人やユダヤ人の精神的発展を語ってはならないのであった⁽⁸⁾。1930年に開かれた第16回党大会では、スターリンは「大ロシア排外主義」、つまりロシア民族以外の民族を軽視する排外主義的志向は、失われた特権を取り戻そうとするロシア民族の支配階級の志向の反映であると述べ、党の民族問題における「主要な危険」だと主張した。他方で非ロシア諸民族の民族主義は、かつて抑圧された民族の不満の反映であるとして、その危険性は「ブルジョア民族主義」を育成し、ソ連の勤労諸民族の統合を弱め、干渉主義者に利用される点にあるとも述べた。スターリンによれば、これらの「偏向」は各民族の文化を十分に発達させ、それらが融合し、共通の文化となる基盤を作ることによって解消されるはずであった⁽⁹⁾。

このような党の民族政策を実行するには、民族学や東洋学、歴史学等の人文社会科学系の知識人の協力が不可欠であった。しかし歴史学の分野では、非ロシア諸民族史の構築を課題とする主張はあまり目立たなかった。H.Л. ルビンштейンは1924年に発表した論説で、初期のマルクス主義史学を牽引したM.H. ボクロフスキーのロシア史研究への貢献をまとめたが、ここでは非ロシア諸民族史研究について一切言及していない⁽¹⁰⁾。これは非ロシア諸民族史研究が課題として認識されていなかったというよりも、非ロシア人地域にマルクス主義歴史家がほとんどいない状況で、これを現実的課題とみなすことは困難であったためだと思われる⁽¹¹⁾。そのため初期の諸民族史研究は、帝政期から活躍する民族学や東洋学の研究者を中心に進められた。

タタルスタンでは、民族問題人民委員部チュヴァシ部門がチュヴァシ人の歴史と民族学に関する資料を出版し、自治共和国と教育人民委員部アカデミー・センターはタタール研究学術協会を創設した。革命前から存在するカザン大学の考古学・歴史学・民族学協会も改組され、研究者の活動を組織した⁽¹²⁾。カザフスタンでは1919年にキルギス軍事人民委員部に創設された歴史統計部門が、歴史や地理、民間伝承、伝統芸能、慣習法などを調査した。同部門は「カザフの昔日…を愛し、記憶し、知っている全てのの人々」に呼びかけて文書や書籍、雑誌、手記、歌など様々な日用品を収集し、教師や学生にアンケート調査を行った。1920年にはキルギス革命委員会人民教育部の学術委員会に改組され、歴史や民族学、考古学、自然地理学の調査を実施した。委員会には現地出身の研究者はいなかったが、それは帝政期に活躍した歴史や文化の研究者の多くがアラシュ党の指導者となったためであった。1920年8月にキルギス自治共和国（1925年からカザフ自治共和国、1936年からカザフ共和国）が設立されると、彼らの一部は国家組織での活動を認められたが、常に当局の警戒の対象となったという⁽¹³⁾。かつてアラシュ党に所属したカザフ人歴史家C.D. アスフェンジャロフは1919年にポリシェヴィキに加

⁽⁸⁾ Сталин 1951, 307

⁽⁹⁾ Коммунистическая партия Советская Союза 1930, 56

⁽¹⁰⁾ Рубинштейн 1924, 189–209

⁽¹¹⁾ 1932年に『革命の東方』誌が掲載したボクロフスキーの追悼文は、その業績を称えながらも、ボクロフスキーの著作に非ロシア諸民族史に関する記述が非常に少ないことを批判した。同誌によればこの課題は、今後の研究に残された「ほぼ手つかずの領域」であった。立石 2011, 40

⁽¹²⁾ Фирсов 1928, 324

⁽¹³⁾ Auezova 2011, 244–245

わり、1921-22年にはスターリンが率いる民族問題人民委員部のトルケスタン代表になるなど多くの重要な職務に就いた。それと同時にモスクワ大学やカザフ国立大学などで歴史を教え、カザフ史に関する歴史書や史料集の作成に携わった⁽¹⁴⁾。

著名な東洋学者 B.B. バルトリドのように、ソヴェト政権の方針に批判的な非マルクス主義知識人も、その研究は非ロシア諸民族を理解する手段として重視された⁽¹⁵⁾。1904-29年に科学アカデミーの常任書記を務めた東洋学者 C.Φ. オリデンブルグは、十月革命後も政権の政策に積極的に協力し、科学アカデミーの支部を新たな共和国に拡大させることを目指した⁽¹⁶⁾。ウクライナを代表する歴史家フルシェフスキーはウクライナ固有の歴史を描き、ウクライナの領土や言語、文化、社会経済の発展の連続性を重視した点で、M.H. ポクロフスキーを始めとするマルクス主義歴史家からも高く評価された⁽¹⁷⁾。非マルクス主義歴史家 B.И. ピチュエタも、フルシェフスキーを高く評価した。彼によれば従来の研究はウクライナやベラルーシの歴史をキエフ・ルーシ史やロシア史、リトワニア史の一部として描いており、フルシェフスキーはこうした伝統的な歴史学を革命前から修正しようと試みてきた先駆者であった⁽¹⁸⁾。このようにウクライナ固有の歴史を描かねばならないという見解は、マルクス主義歴史家と非マルクス主義歴史家の双方に共有されていた⁽¹⁹⁾。

こうして初期の非ロシア諸民族史研究は、党・政府の民族政策と密接に結びつきながら、非ロシア諸民族の文化の向上と民族意識の育成という目的を共有する知識人の協力のもとで展開していった。

2. 第一回全連邦マルクス主義歴史家大会と非ロシア諸民族史

「ロシア史」から「ソ連の諸民族史」への移行が歴史家の課題として明示されたのは、1928年末から1929年1月初頭に開かれた第一回全連邦マルクス主義歴史家大会でのことであった。それと同時にこの会議でマルクス主義歴史家たちは、諸民族の歴史研究をソ連全体の歴史といかに調和させるのかという課題に、おそらく初めて直面することになった。

ロシア史部門に代わって新たに組織されたソ連邦諸民族史部門の会議では、ウクライナ史、アルメニア史、グルジア史、アゼルバイジャン史、中央アジア史の研究状況が報告された。これらの報告のほぼ全てに共通した論点は、地方の民族主義との闘いであった。アルメニア史研究について報告した A. ギリヤン は、アルメニアのマルクス主義歴史家の基本的課題は、長年民族政党によって培われてきた民族主義と闘い、ザカフカース共通の歴史を描くことだと発言したが、これに対して異議は唱えられなかった。例えば П. オヴァニシヤン は、ザカフカース史だけでなくソ連内のプロレタリアートの革命運動との関連でアルメニア史を検討することが

⁽¹⁴⁾ Kemper 2009, 15-16

⁽¹⁵⁾ Yountchi 2011, 222

⁽¹⁶⁾ Каганович 2006, 69-199, Скрыбин 1986, 4-12, Yountchi 2011, 222

⁽¹⁷⁾ Plokhly 2005, 369

⁽¹⁸⁾ Пичета 1922, 30-32

⁽¹⁹⁾ ウクライナのマルクス主義歴史家 M.A. ルバチは1929年5月にウクライナ党中央委員会に宛てて、フルシェフスキーとマルクス主義歴史家の双方がウクライナ史の民族的、領土的、社会・経済的独自性を認めていると報告した。ルバチによれば両者の違いは、このウクライナ史の独自性の中にいかなる社会的・階級の本質が含まれるのかという点にあった。なおこの報告は、ウクライナ共和国扇動宣伝部長フヴィリの要求により作成された。Rubach 1929, 121-122

必要だと発言し、アルメニア民族史ではなく、ソ連内の他民族との共通の歴史を研究する必要性を強調した⁽²⁰⁾。

これとは対照的に出席者の間に論争を呼んだのは、民族地域におけるロシア帝国の支配の影響であった。グルジア史について報告したΦ. マハラーゼは、ロシア帝国の支配はグルジアに革命運動を生じさせ、それを発展させる全ての前提状況を作り出したとして肯定的に評価した。しかしボクロフスキーは、マハラーゼはロシア帝国によるグルジア併合を「あまりにも柔らかい語調で」描いており、まるでグルジアがロシアに自発的に加わったかのような印象を受けると疑問を呈した⁽²¹⁾。またA.B. シェスタコフも、もしマハラーゼの立場に立つならば、資本主義を生み出したあらゆる植民政策が進歩的だということになると述べ、したがってこの見解は誤りだと発言した⁽²²⁾。

マハラーゼはこれに反論して、ロシア帝国による併合全体を正当化しようとするつもりはないと述べ、当時の状況では、ロシアの支配はグルジアにとって最も有益な解決策であったのだと主張した。彼によれば、もしグルジアがペルシャやオスマン帝国に併合されていたとしてもグルジア人の運命が緩和されることはなく、逆に衰退の一途をたどっていた、したがってロシア帝国による併合は「相対的に進歩的な現象」なのであった⁽²³⁾。この主張からは、ロシア帝国によるウクライナとグルジアの併合について1930年代後半に党・政府の公式見解となる「より小さな悪」論が、すでに1920年代末に一部の歴史家に共有されていたことがうかがわれる。

ロシア帝国の統治の影響は、中央アジア史についても論点となった。中央アジアにおける民族解放運動の時代区分について報告したΠ. ガルゾは、19世紀半ばに起こったケネサル反乱について、当時の中央アジア諸民族はまだ完全に自国を形成しておらず、ロシアからの独立だけでなく統一国家の創設も課題であったとして、この二つの課題を掲げたケネサル反乱は進歩的かつ革命的であったと主張した。さらにこの時期には全ムスリムが階級の区別なく非ムスリムのロシア人(русские)との闘争に加わったとし、ここでは「聖戦」が進歩的スローガンとして機能したとも述べた⁽²⁴⁾。

この報告についてはいくつかの反論が上がった。まず一つ目は、ロシア人農民や労働者は帝政による民族地域の抑圧に責任はないのだから、「ロシア人(русские)」ではなく「ロシア国家の(российские)」という用語を使うべきだというものである。これに対してはガルゾも他の出席者も異論を示さなかった。次に問題となったのは「ロシアに対する全ムスリムの闘争」、つまり中央アジア諸民族のあらゆる階級がロシアの支配に対して共闘した時期が存在したという見解であった。K. ヴェシレフスキーは、ロシア帝国の中央アジア侵略が比較的容易であったのは、現地の上層階級がロシアを支持したからだとして、中央アジア諸民族の階級間の利害の違いを理解すべきだと主張した⁽²⁵⁾。

⁽²⁰⁾ Коммунистическая академия 1930, 472–473, 481

⁽²¹⁾ Коммунистическая академия 1930, 492–493

⁽²²⁾ Коммунистическая академия 1930, 550. なおシェスタコフは1930年代後半にはマハラーゼと同様の立場に立つようになり、彼がマハラーゼを批判したのと同じ理由で、党を代表する歴史家E. ヤロ斯拉フスキーから批判を受けることとなる(立石 2011, 167–169)。

⁽²³⁾ Коммунистическая академия 1930, 500

⁽²⁴⁾ Коммунистическая академия 1930, 521–524. ムスリム諸民族史におけるイスラームの役割について、1920年代のマルクス主義歴史家の間に一致した見解は存在しなかった。当時の議論については、Kemper 2009 参照。

⁽²⁵⁾ Коммунистическая академия 1930, 547

マハラーゼは、「聖戦」が真に革命的なスローガンであったという見解に疑問を表明し、1918-19年のデニーキンの北カフカース侵攻の際にチェチェンで様々な聖戦者と面会したという自らの経験から、「聖戦」が革命的スローガンだとは思えないと発言した⁽²⁶⁾。A. ヴァシユチンスキーは、ケネサルの評価はこれまで十分に検討されておらず、イギリスのエージェントではないかという説もあると述べ、今後のさらなる検討が必要だと主張した⁽²⁷⁾。

このように中央アジア史に関する議論には、ケネサルの反乱や「聖戦」の性質、各民族内部の階級的亀裂の評価など、その後スターリン期に重要な論点となるものも含まれていた。しかし、より議論が集中したのは、ロシアが中央アジアにもたらした影響は進歩的か否かという問題であった。これに対して、中央アジア諸民族による階級横断の闘争というガルズの見解に疑問を表明し、各民族内部の階級対立に注目すべきだと主張したのは出席者12人のうちわずか2人であり、ケネサルの評価を問題にしたのは1人のみであった。またこれらの問題については、ボクロフスキーも特に発言しなかった。

会議で重要な論点となったもう一つの問題は、ロシア史研究における「大国排外主義」であり、この問題は主にウクライナ史との関係で論争となった。この問題を提起したのはウクライナの歴史家3. グレーヴィチであり、主な批判の対象となったのはM.B. ネーチキナの著作『統一スラヴ協会』(1927出版)⁽²⁸⁾であった。グレーヴィチはこの本について、統一スラヴ協会がウクライナで作られた組織であることに全く言及しておらず、ウクライナの社会的、政治的、文化的状況がこの組織に与えた影響を検討していないと批判し、これはロシアの歴史研究における「大国排外主義」であり、あるいは「民族ニヒリズム」であると主張した⁽²⁹⁾。

これに反論したネーチキナは、統一スラヴ協会とウクライナの民族的イデオロギーとの関連を見出すことはできず、またウクライナに住むポーランド貴族の影響も強かったことから、この組織を「ウクライナのデカブリスト」と見なすことはできないと答えた⁽³⁰⁾。O. ゲルマイゼは、ウクライナが独自の歴史的発展を遂げたことを否定する者はいないと述べながらも、ウクライナ史のマルクス主義的解釈のために、ウクライナ史をロシア史から切り離す必要があるとは思わないと発言した⁽³¹⁾。

ウクライナを代表するマルクス主義歴史家M.И. ヤヴォルスキーは、ロシアとウクライナの革命運動の双方を描いた自身の著作に対して、なぜロシアとウクライナの歴史過程を合わせて描いたのか、民族別に描くべきではないかという批評があったと述べ、このような見解はロシア人の歴史家が今も繰り返している誤りだと主張した。ヤヴォルスキーは、民族の原理で歴史に接近してはならないとし、ウクライナの革命運動を検討する場合にウクライナ民族の運動だけを視野に入れるのは非マルクス主義的であると主張した。彼によれば、ウクライナの領土内で起こり、ウクライナ人の活動と結びついた革命運動は全てウクライナの革命運動とみなされるべきであった⁽³²⁾。このようにヤヴォルスキーは、民族ではなく地域を単位として歴史を描

⁽²⁶⁾ Коммунистическая академия 1930, 540

⁽²⁷⁾ Коммунистическая академия 1930, 549

⁽²⁸⁾ ボクロフスキーが編集するシリーズ「デカブリストの反乱」の一部として、1923年に執筆された(Нечкина 1927, 6)。統一スラヴ協会は1823年にウクライナで作られた革命組織。ウクライナ人のほかに、ポーランド人、ロシア人、ハンガリー人などから構成され、スラヴ民族の解放と君主制の廃止などを目標とした。1825年にはウクライナで創設されたデカブリストの一組織である南部協会と統合した。

⁽²⁹⁾ Коммунистическая академия 1930, 440

⁽³⁰⁾ Коммунистическая академия 1930, 442-443

⁽³¹⁾ Коммунистическая академия 1930, 451

くことで、ウクライナ史の独自性を示すべきだという見解を示した。

以上をまとめれば、中央アジア史、グルジア史について主要な論点となったのはロシア帝国の統治の評価であり、ウクライナ史についてはその独自性が論点となった。これは、ロシアと多くの歴史を共有し、マルクス主義歴史家、非マルクス主義歴史家双方の層が比較的厚いというウクライナの特異性が生み出した論争であったと考えられる。

全連邦の理論誌『マルクス主義の旗の下に』誌は、この大会について、ウクライナ史の独自性の問題は「大論争を引き起こした」と伝えた。同誌によれば、この大会でマルクス主義歴史家たちは民族の歴史という問題に直面したのであり、この問題を解釈するうえで、いかに「民族主義的偏向」を回避するかが論点となったのであった⁽³³⁾。M.H. ポクロフスキーは後に、大会でロシア人の歴史家に向けられた「大国排外主義」という批判に言及して、これはロシア人の歴史家が「民族的説明」よりも「階級的説明」を好んだために受けた批判であると説明し、全く必要のない批判であったと述べた⁽³⁴⁾。他方で、大会での議論をウクライナ共和国党中央委員会に報告した同教育人民委員部のC. セムコは、ポクロフスキーはウクライナの歴史学と歴史家に否定的であり、ウクライナの歴史家は黨員歴史家も含めて全てが民族排外主義者であるかのように捉えていると伝えた⁽³⁵⁾。このように、この大会では、ポクロフスキーとウクライナのマルクス主義歴史家の見解の相違が解消されることはなかった。

3. 「文化革命」と非ロシア諸民族史の描写

前述のように新政権の下では、抑圧を受けた民族の民族主義を許容し、その民族運動を支配民族の勤労者の階級闘争と同様に高く評価するという発想が広く共有されていた。しかし、1920年代末に始まった「文化革命」は、こうした見解が再検討される契機となった。フィッツパトリックによればソ連初期の文化革命とは、十月革命前から活動続ける非マルクス主義知識人の協力のもとで大衆の文化水準の漸進的向上を目指すことを意味し、この理念は1930年代後半以降にも再び公式見解に採り入れられた。しかし、1920年代末から1930年代初頭に用いられた「文化革命」という用語は、あらゆる学術分野における階級闘争の強調と、非マルクス主義知識人や権威のあるマルクス主義知識人に対する攻撃的批判と一体となっていた⁽³⁶⁾。

「文化革命」が自国史像に与えた影響の全体像はいまだ明らかになっていないが、旧体制下から活躍する知識人への批判が急速に広まるなかで、ロシア人、非ロシア人双方の非マルクス主義歴史家の多くが政治的批判の対象となった⁽³⁷⁾。それと同時に、マルクス主義歴史家を代

⁽³²⁾ Коммунистическая академия 1930, 462. ヤヴォルスキーの見解によれば、19世紀のウクライナでは支配階級の多くがロシア人であり、ウクライナ人の貴族やブルジョアジーは少数であった。そのため社会主義は民族問題と密接に結びつき、社会主義者の多くが民族主義者と同盟したが、これは主に知識人や小ブルジョワジーの運動であった。これに対して労働者は、大部分がロシア化していたため民族問題に対する関心が低く、帝国内の他の民族の労働者と共闘したという。Яворский 1925, 98–101

⁽³³⁾ Фридлянд 1929, 108. ヤヴォルスキーはこの大会で「ウクライナ史の枠組み」に関する別の報告を準備していたが、これは議題から除外された。大会でこのことに言及したポクロフスキーは、これは今後検討されるべき興味深い問題だと述べたが（Коммунистическая академия 1930, 467–468）、報告が除外された理由は明らかになっていない。

⁽³⁴⁾ この報告は『マルクス主義歴史家』誌に掲載された。Покровский 2011, 339

⁽³⁵⁾ Semko 1929, 116

⁽³⁶⁾ Fitzpatrick 1978, 1–4

表するポクロフスキーに対する批判も高まったことが知られている⁽³⁸⁾。1920年代末のポクロフスキーは歴史を経済的要素だけで説明することはできないと述べて、それまで用いていた「経済的唯物論」という概念を否定したが、これは歴史における経済的要素を偏重し、階級闘争という政治的要素を過小評価しているとの批判の高まりに対応しようとしたものと考えられる⁽³⁹⁾。こうした批判の広まりには、急激な工業化に知識人を利用しようとする政治指導部による学術研究の統制という側面だけでなく、学生や若い世代の知識人のなかに、年長世代の知識人——マルクス主義者と非マルクス主義者の双方を含む——に対して攻撃的批判を向けようとする自己利害に基づく要素があったことが指摘されている⁽⁴⁰⁾。

以下ではウクライナとムスリム諸民族地域の一部を中心として、この時期の自国史像をめぐる議論を検討する。

(1) ウクライナとモスクワのマルクス主義歴史家の論争

1920年代末にはウクライナでも民族主義に対する批判が高まり、ウクライナ民族主義はロシアの大国排外主義を上回る脅威となったとさえ言われた⁽⁴¹⁾。その結果、フルシエフスキーを始めとする「ブルジョア歴史家」への批判が高まっただけでなく、ウクライナを代表するマルクス主義歴史家ヤヴォルスキーも、ウクライナの革命をロシアの十月革命から独立したものとして描いた等の理由で批判の対象となった⁽⁴²⁾。

1929年5月には、ウクライナのマルクス・レーニン主義研究所でヤヴォルスキーの主張を検討する会議が開かれた。ここで発言したヤヴォルスキーは、革命前のロシアとポーランドの歴史学について、単一不可分のポーランド民族あるいはロシア民族という観点から歴史を描いており大国主義的であると述べるとともに、他方で革命前のウクライナの歴史学は、ウクライナを階級のない民族とする民族主義的観点からウクライナ史を描いたと批判した。しかし、ロシアのマルクス主義史学もウクライナ史の新たな枠組みを構築することには成功しておらず、その研究は依然として古い限界のなかにとどまっていると彼は述べ、これはウクライナの一部のマルクス主義歴史家も同様だと主張した⁽⁴³⁾。

これに対してハリコフのマルクス主義歴史家Г.А. カルペンコは、ヤヴォルスキーは革命前のロシアとポーランドの歴史学を批判するにとどまり、彼自身もウクライナ史に固有の枠組みを提示しているわけではないと発言した。カルペンコによれば、ポクロフスキーの描くロシア史が民族問題を過小評価したという批判は適切だとしても、大国排外主義的であるという批判

⁽³⁷⁾ マーチンによれば、ウクライナやベラルーシ、タタルスタンなど革命前に著名な知識人を輩出した共和国では、非ロシア人の知識人を標的とした見せしめ裁判が行われた。1930年3-4月に行われた「ウクライナ解放同盟」裁判では、非党員知識人の多くが被告となった(Martin 2001, 249-254)。ロシア共和国で多数の非マルクス主義歴史家が、政治的に捏造された事件によって逮捕された「アカデミー事件」については、土肥 2000, 38-43 参照。

⁽³⁸⁾ Enteen 1978, 154-155, バーバー 1996, 107

⁽³⁹⁾ 1932年のポクロフスキーの死の直後に書かれた追悼文の多くが、ポクロフスキーが晩年に「経済的唯物論」という誤りを修正したことを強調しており、この時期、歴史における経済的要素の偏重に対して批判が高まっていたことがうかがえる。立石 2011, 69

⁽⁴⁰⁾ フィッツパトリックはこうした側面を、「下からの革命」と呼んでいる。Fitzpatrick 1978, 6-7. 歴史学、特に共産党史研究の分野については、Enteen 1978, 154-156, バーバー 1996, 111-116

⁽⁴¹⁾ Martin 2001, 249-252

⁽⁴²⁾ Yekelchuk 2004, 16

⁽⁴³⁾ Dyskusiiia 1930, 270-271

は不適當であった。さらに民族問題の過小評価という問題も、П.Н. ミリュコーフら同時代のブルジョア歴史家と比べれば、取るに足らないものであった。カルペンコはこのように反論したうえで、ヤヴォルスキーのポクロフスキー批判は有害だと批判し、モスクワの歴史家との協力の必要性を訴えた⁽⁴⁴⁾。

同時期のウクライナでは、モスクワのマルクス主義歴史家に対する批判も高まった。1930年11月6、7日に開かれたウクライナのマルクス主義歴史家協会会議では、ロシアのマルクス主義歴史家を批判する決定が採択された。決定は、ロシアのマルクス主義歴史家はウクライナ人とウクライナ史の独自性を否定していると批判し、出席者の全員一致で採択された。この決定によれば、多数の諸民族を抑圧した巨大な植民地帝国であるロシアにとって、被抑圧諸民族の闘争と民族問題は重要な意義を持つにもかかわらず、ロシアのマルクス主義史学はウクライナ史に対するブルジョア史学の民族的・大国排外主義的理論を批判していないのであった⁽⁴⁵⁾。

これに対してモスクワのマルクス主義歴史家の間では、ヤヴォルスキーはマルクス主義歴史家の意識の調和を破壊する民族主義の立場に立ち、民族を歴史の発展の決定的要素であるかのように描いているという批判が起こった⁽⁴⁶⁾。こうした論争の先鋭化は歴史学に対する政治の介入を招き、ウクライナではマルクス主義歴史家を代表するヤヴォルスキーと非マルクス主義歴史家を代表するフルシェフスキーの双方が、民族主義組織への関与を理由として逮捕されるという事態を引き起こした⁽⁴⁷⁾。

また1929年5月の会議でヤヴォルスキーを批判したカルペンコは、その前年に執筆したウクライナ・ロシア史教科書に対して、ロシアの「大国主義であり、ウクライナ史を根絶しようとしている」という批判と、「田舎風」であり、「ウクライナ愛国主義によるロシアの歴史過程の汚染」だという相反する批判を受けて、その後党から除名された⁽⁴⁸⁾。この事例は、何がマルクス主義的なウクライナ描写であり、何が「民族主義的偏向」なのかという問題が、いかに解決困難であったかを示しているといえる。

(2) 階級闘争の強調と非ロシア諸民族の指導者の描写の変化

「文化革命」は、ウクライナ以外の地域の歴史研究にも影響を与えた。1930年に『マルクス主義歴史家』誌に掲載された北カフカース研究に関するH. ブルキンの書評論文は、山岳諸民族の「真の歴史」を構築する必要性を強調したうえで、ロシアの植民地政策に対する山岳諸民族の英雄的戦いと、カフカース内部の階級闘争の双方の描写が必要だと述べた。ここには、被支配民族の民族運動を支配民族の革命運動とともに並べて高く評価するというソ連初期に広く共有された発想が反映されていた。

しかし、反乱を率いた指導者に対する評価には変化が見られた。ブルキンは、第16回党大会でスターリンが、主要な危険はロシアの大国排外主義だと発言したことに触れつつも、民族

⁽⁴⁴⁾ Dyskusiiia 1930, 272–274

⁽⁴⁵⁾ この決定はロシア科学アカデミー文書館のポクロフスキーのフォンドに保存されており、ユルガノフの著作に引用されている。Юрганов 2011, 34–35

⁽⁴⁶⁾ Юрганов 2011, 36–37. ユルガノフによれば、ウクライナ・マルクス主義歴史家協会の決定の審議の際、ポクロフスキーはウクライナにおいても主要な危険はロシアの大国排外主義であると述べて、決定に一定の理解を示したという。Юрганов 2011, 39–40

⁽⁴⁷⁾ Plokyh 2005, 265, Юрганов 2011, 27

⁽⁴⁸⁾ 立石 2011, 105

地域内部の階級闘争を無視して対ロシア反乱を民族解放闘争として描く傾向は、民族地域を社会主義建設の過程から切り離そうとする試みだと批判し、山岳諸民族内部の階級分化や階級闘争の描写の必要性を強調した。彼は、一方ではミュリディズムが上層階級によって利用されたに過ぎないとする見解を大國排外主義として批判しながらも、他方ではシャミーリの反乱が敗北したのは内部の階級的対立と衝突のためだと述べ、イスラームは抑圧された大衆の利益にはならなかったと主張した⁽⁴⁹⁾。

IO. ショフクリンスキーも同様に、シャミーリはあらゆる支配階級と闘って身分制や封建制を廃止したわけではないと述べ、上層部の利害は抑圧された北カフカースの農民大衆の利益とは根本的に異なるものであったと主張した⁽⁵⁰⁾。北カフカース史を専門とする H.И. ポクロフスキー（有名な M.H. ポクロフスキーとは別人）も、シャミーリの国家は民主主義的政府から封建国家へと変質したという説を展開した⁽⁵¹⁾。

これらの主張は、1920 年代前半の M.H. ポクロフスキーの説とは明らかに異なっていた。ポクロフスキーは 1923 年に出版した著作で、シャミーリの反乱の思想的基盤となったミュリディズムの内部の序列は、財産の所有ではなく若者の情熱と服従への熱望に基づいていたとし、これを「民主主義的要素」と述べていた。さらにシャミーリについても、その個性を高く評価していた⁽⁵²⁾。つまり 1920 年代前半のポクロフスキーは、ミュリディズム内部の階級的亀裂を強調することはなく、この反乱が持った宗教的、地域的、民族的特性も重視しており、階級的観点を前面に押し出してはいなかった。こうしたことを念頭におくなら、「文化革命」は北カフカース史の描写においても、階級的観点を中心に歴史を解釈しようとする主張を生み出したといえることができる。こうした変化には、「文化革命」期にムスリム地域で反宗教政策が強められ、イスラームは封建的搾取の基盤であるという主張が高まったことが大きな影響を与えたと考えられる⁽⁵³⁾。

このような変化は、ウクライナ史におけるフメリニツキーの反乱の描写にもみられた。前述のように 1920 年代末のウクライナでは民族主義に対する批判が高まったが、このなかでフルシェフスキーは、フメリニツキーの反乱をポーランドに対する民族解放闘争として描き、ウクライナ内部の階級対立の要素を軽視したと批判された。それと同時に、フメリニツキーの反乱は商業資本に導かれた革命であるというポクロフスキーの説も否定され、反乱の主体として、農民の肯定的役割が強調されるようになった⁽⁵⁴⁾。

北カフカース史やウクライナ史の描写における変化は、カザフ史におけるケネサルの反乱の描写とも共通していた。やや後の時期になるが、1935 年に出版されたアスフェンジャロフの著作『カザフスタン史』はこの反乱を、帝政とカザフの封建制の双方に対して自然発生的に起こった農民反乱であると特徴づけた⁽⁵⁵⁾。また翌年にアスフェンジャロフの編集で出版されたカザフ史の史料集によれば、「ブルジョア歴史家」はケネサルの反乱を含む 19 世紀後半のカザ

⁽⁴⁹⁾ Буркин 1932, 140–153. ここでのミュリディズムとは、イスラーム法を基盤とする国家建設を目指し、非ムスリムのロシア人に対する聖戦を唱えた 1820–60 年代初めの宗教運動を指す。

⁽⁵⁰⁾ Шовкринский 1932, 167–168

⁽⁵¹⁾ Покровский 2009, 4–5

⁽⁵²⁾ Покровский 1923, 206–207, 211–212, 216

⁽⁵³⁾ ケンパーによれば、1930 年代初頭にはイスラーム自体が封建性の産物であると見なされるようになり、イスラームに関する議論はより攻撃性を帯びるようになった。Kemper 2009, 36–37

⁽⁵⁴⁾ Plokhv 2005, 410–411

⁽⁵⁵⁾ Асфендияров 1998, 167

フ人の闘争を、カザフの氏族長による反動的運動と捉えており、他方でカザフの民族主義者やロシアのナロードニキと自由主義者は、この運動をカザフ人の民族闘争と捉え、それを率いたケネサルを「人民的、全民族的英雄」とみなしてきた。同書は、この二つの観点はどちらも特定の階級的目的から史実を歪曲していると述べ、実際にはこれらの反乱は農民による蜂起であり、上層階級はその一部が加わったに過ぎないと主張した⁽⁵⁶⁾。

前述のように、1920年代末に開かれたマルクス主義歴史家協会大会でガルゾは、ケネサルの目的はカザフ人、キルギス人の統合とロシアからの独立にあったという理由で、これを進歩的、革命的な反乱と評価した。しかし、これに対して疑問を表明した出席者はわずかであった。さらに、この反乱を帝政に対する中央アジア諸民族のあらゆる階級の共闘とみなすガルゾの見解に疑問を呈し、民族内部の階級的亀裂に注目すべきだと主張したのも2名のみであり、どちらも大きな論争には発展しなかった。しかし、アスフェンジャロフの著作や彼が編集した史料集の記述からは、「文化革命」期における階級闘争の強調が、ケネサルの反乱を始めとするカザフ人の反乱の描写においても、カザフ社会内部の階級的亀裂を強調し、反乱の指導者ではなくカザフ人農民を反乱の主体とみなすという方向への変化を生み出したことがうかがわれる。

結 わ り に

本稿で検討したように、「文化革命」はウクライナ独自の歴史を模索したウクライナの歴史家に対する批判を高め、非マルクス主義歴史家だけでなく、マルクス主義歴史家も逮捕されるという事態を引き起こした。さらに他の地域の歴史描写においても、民族や経済的要素ではなく、階級闘争の観点から歴史を描くべきだという主張が主流となり、各民族の階級的亀裂が重視されるようになった。

「文化革命」期には歴史学だけでなく、あらゆる学術分野で階級闘争の要素が前面に押し出され、ポクロフスキーもそれが歴史に与える影響を認めざるを得なくなっていた。しかし、ここには歴史学や民族学に固有の問題も存在した。それは、ソ連の民族政策が、各地域を単位とする諸民族のアイデンティティの形成を一貫して目指したことであった。前述のように非マルクス主義歴史家ピチュエータは、ロシア史やポーランド史とは異なるベラルーシ固有の歴史の構築を訴えたが、多民族が居住するベラルーシの都市の住民や、地方への帰属意識が強い農民の間では、ロシアや他のスラヴ系諸民族の文化とベラルーシの文化を区別する意識は少なかったと言われている。またアゼルバイジャンでは革命前に独自の国家が形成されたことがなく、より広大なムスリムの共同体であるウンマの一員という意識を保持するムスリムが多数を占めていた⁽⁵⁷⁾。

こうした状況のなかで歴史家や民族学者は、ソ連という新国家の歴史を構築するとともに、各地域を単位として諸民族のアイデンティティを形成するという課題に貢献しようとした。例えばアゼルバイジャンの民族学の課題について述べたA.アレクペロフらは、大国排外主義と地方の民族主義との闘いを民族学の課題としたうえで、アゼルバイジャンに住むクルド人、チュルク人（アゼルバイジャン人）、アルメニア人の起源と文化の共通性を明らかにし、それぞれ

⁽⁵⁶⁾ Асфендияров, Кунте 1998, 3–7

⁽⁵⁷⁾ Suny 1993, 33–35, 39

の民族主義を打倒することが必要だと述べた⁽⁵⁸⁾。したがって歴史家は「文化革命」期にも、階級闘争という要素のみを歴史研究の基本的枠組みとすることはできず、ロシア帝国の統治政策を批判しながら、民族や宗教、文化、言語といった多様な要素からなる諸民族のアイデンティティを、新たに領域別に再構築していくという課題に直面したのであった。

1932年のボクロフスキーの死後、M. レディンは、ロシアのマルクス主義史学は大国排外主義的であるというヤヴォルスキーの批判に反論して、民族問題における偏向のなかで特に危険なのは大ロシア人の大国排外主義だという全党的立場を、ボクロフスキーも共有していたと主張した。レディンは、全連邦マルクス主義歴史家大会でのマハラゼの報告に対するボクロフスキーの反論を引用したうえで、ボクロフスキーはソ連の諸民族史研究を発展させることはできなかったが、その必要性を誰よりも示し、それを促進しようとしたと擁護した。レディンによれば、ロシアの大国排外主義であれ地方の民族主義であれ、民族主義の基本的立場は民族の「太古からの連続性」という概念であり、ウクライナの民族主義者はウクライナ民族の永久性を主張し、ロシア人の民族主義者もロシア民族について同様の主張をするが、これに対してボクロフスキーは民族が歴史のカテゴリーであることを示し、具体的史料によって民族の形成過程を明らかにしたのであった⁽⁵⁹⁾。

このようにレディンはボクロフスキーを擁護したが、彼がここで引用したボクロフスキーの発言はグルジア史に関するものであり、ウクライナ史に関する発言ではなかった。前述のようにボクロフスキーはマハラゼの発言には否定的態度を示したが、ウクライナのマルクス主義歴史家が、ロシアの歴史家に対して大国排外主義という批判を向けたことには疑問を表明していた。さらにマハラゼが強調したのはロシア帝国によるグルジア統治の肯定的意義であったが、ウクライナのマルクス主義歴史家が強調したのは、ロシア史とは異なるウクライナ史の独自性であり、歴史におけるウクライナ独自の要素の重要性であった。つまり、彼らが提起した問題は相互に関連するものの本質的には異なる問題であり、したがってこのレディンの主張は、ウクライナのマルクス主義歴史家を納得させることはできなかったと思われる。

諸民族のアイデンティティの確立という課題は、「文化革命」が終わり、帝政期から活躍する非マルクス主義歴史家たちが復権された後も継続し、1930年代半ばに各共和国の境界がほぼ確定し、さらにナチス・ドイツの歴史学との対抗という課題が視野に入り始めると、より一層の重要性を持つようになる。カザフ人のマルクス主義歴史家アスフェンジャロフは、中央アジアの共和国の境界画定に携わる一方でカザフ自治共和国史料集を編纂したが、彼はその序文で「パン・チュルク主義」、「パン・タタール主義」、「パン・ウズベク主義」が中央アジアの諸民族に対立と憎悪を広めていると述べ、それに代わる「カザフ自治共和国の歴史」を描く必要性を強調した⁽⁶⁰⁾。サマルカンドでは1936年に歴史学会議が開かれ、中央アジア史をカザフ史、タジク史、ウズベク史など各共和国の歴史として個別に再構築することが目指された⁽⁶¹⁾。

こうした変化は、諸民族内部の階級的亀裂と民族の一体性のどちらを強調するべきかという論争を再び先鋭化させることになる。つまりスターリン期の歴史家は、革命と内戦の混乱のな

⁽⁵⁸⁾ Алекперов, Вартапетов 1932, 191–192

⁽⁵⁹⁾ Редни 1932, 38, 52–53

⁽⁶⁰⁾ Асфендияров, Кунте 1997, 5. 1940年代における中央アジアの民族起源論研究の隆盛については、宇山 1999, 16–107, Laruelle 2008, 169–188

⁽⁶¹⁾ Smith et al. 1998, 70

かで新国家を建設し、諸民族のアイデンティティを領域別に形成するという課題に直面したソ連初期の歴史家たちが解決できなかった問題——「階級」や「民族」をいかに諸民族史の解釈に採り入れるのか、それらを基にしたソ連の諸民族の歴史と、国民全体が共有しうる自国史像をいかに形成するのか——を、独ソ戦と冷戦という新たな国際環境の中で、一貫して議論続けたということができる。

参 考 文 献

- 宇山智彦 (1999) 「カザフ民族史再考——歴史記述の問題によせて——」『地域研究論集』vol. 2, no. 1.
- 立石洋子 (2011) 『国民統合と歴史学——スターリン期ソ連における『国民史』論争——』学術出版会。
- 土肥恒之 (2000) 『岐路に立つ歴史家たち——20世紀ロシアの歴史学とその周辺——』山川出版社。
- バーバー, ジョン (湯川順夫訳) (1996) 「ソ連邦における知的正統性の確立——1928–1934年——」『思想』第862号。
- Auezova, Zifa-Alua (2011), “Conceiving a people’s history: the 1920–1936 discourse on the Kazakh past”, in Kemper, Michael and Conerman, Stephan, eds., *The Heritage of Soviet Oriental Studies*, London and New York: Routledge.
- Brandenberger, David (2002), *National Bolshevism: Stalinist Mass Culture and the Formation of Modern Russian National Identity, 1931–1956*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- “Dyskusiiia z privedu skhemy istoriyi Ukrayini M. Iavors’koho (traven’ 1929 r.)”, *Letopys Revoliutsiyi*, no. 1, 1930.
- Enteen, George M. (1978), “Marxist Historians during the Cultural Revolution: A Case Study of Professional Infighting” in Fitzpatrick, Sheila ed., *Cultural Revolution in Russia, 1928–1931*, Bloomington: Indiana University Press.
- Fitzpatrick, Sheila ed. (1978), *Cultural Revolution in Russia, 1928–1931*, Bloomington: Indiana University Press.
- Kemper, Michael (2009), “The Soviet Discourse on the Origin and Class Character of Islam, 1923–1933”, *Die Welt des Islams*, no. 49.
- Laruelle, Marlene (2008), “The concept of Ethnogenesis in Central Asia: Political Context and Institutional Mediators (1940–50)”, *Kritika*, vol. 9, no. 1, winter.
- Martin, Terry (2001), *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923–1939*, Ithaca and London: Cornell University Press (マーチン, テリー著, 半谷史郎監修 (2011) 『アフターマティヴ・アクションの帝国——ソ連の民族とナショナリズム, 1923年～1939年——』明石書店)。
- Plokhyy, Serhii (2005), *Unmaking Imperial Russia: Mykhailo Hrushevsky and the Writing of Ukrainian History*, Toronto Buffalo London: University of Toronto Press.
- Rubach, M.A. (1929), “Z dopovidnoyi zapysky ukrayins’koho istorika M. Rubacha do TsK KP(b)U pro dyskusiiu sered istorikov-komunistiv”, Comp. R.Ia. Pyrih et al. (1997), *Mykhailo Hrushevs’kyi: Mizh istoriieiu i politykoiu (1920–1930-ti rr.)*. Zbirnyk dokumentiv i materialiv, Kyiv: Instytut ukrayins’koyi arkhieohrafiyi ta dzhereloznavstva imeni M.S. Hrushevs’koho NAN Ukrayiny, Tsentral’nyi derzhavnyi arkhiv hromads’kykh ob’iednan’ Ukrainy.
- Semko, S. (1929) “Dopovidno zapyska chlena kolegiyi narkomосу USSR S. Semko do TsK KP(b)U pro vsesoiuznu konferentsiiu istorikov-marksystiv”, Comp. R.Ia. Pyrih et al. (1997), *Vkaz. pratsia*.
- Slezkin, Yuri (1994), “The USSR as a Communal Apartment, or How a Socialist State Promoted Ethnic Particularism”, *Slavic Review*, vol. 53, no. 2 (Summer).
- Smith, Graham et al. (1998), *Nation-building in the Post-Soviet Borderlands: The Politics of National Identities*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Suny, Ronald Grigor (1993), *The Revenge of the Past: Nationalism, Revolution, and the Collapse of the Soviet Union*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Tillet, Lowell (1969), *The Great Friendship: Soviet historians on the non-Russian nationalities*, Chapel Hill: University of north Carolina Press.
- Yekelchyyk, Serhii (2004), *Stalin’s Empire of Memory: Russian-Ukrainian Relations in the Soviet Historical Imagination*, Toronto: University of Toront Press.
- Yountchi, Lisa (2011), “The politics of scholarship and the scholarship of politics: imperial, Soviet, and post-Soviet scholars studying Tajikistan”, in Kemper, Michael and Conerman, Stephan, eds., *The Heritage of Soviet Oriental Studies*, London and New York: Routledge.
- Алекперов, А., Вартапетов, А. (1932), “Задачи этнографии в Азербайджане”, *Советская Этнография*, № 5–6.

- Асфендияров, С.Д., Кунте, П.А., ред. (1997), *Прошлое Казахстана в источниках и материалах*. Сб.1. 2-е изд, Алматы: Казакстан.
- Асфендияров, С.Д., Кунте, П.А., ред. (1998), *Прошлое Казахстана в источниках и материалах*. Сб.2. 2-е изд, Алматы: Казакстан.
- Асфендияров, С.Д. (1998) *История Казахстана (С древнейших времен.)* 3-е изд, Алматы: Санат
- Буркин, Н. (1932), “О великодержавных и националистических тенденциях в горской исторической литературе”, *Историк-марксист*, Т. 1-2 (23-24).
- Каганович, Б.С. (2006), *Сергей Федорович Ольденбург. Опыт биографии*, СПб: Феникс
- Коммунистическая академия (1930), *Труды Первой Всесоюзной конференции Историков-марксистов: 28/XII-1928–4/I-1929*, Т.1, Москва: Издательство Коммунистической Академии.
- Коммунистическая партия Советская Союза (1930), *XVI съезд Всесоюзный Коммунистической партии (б). Стенографический отчет*, Москва, Ленинград: Государственное издательство.
- Нечкина, М.В. (1927), *Общество соединенных славян*, Москва, Ленинград: Государственное издательство.
- Пичета, В. (1922), “Очередные вопросы белорусской историографии”, *Вестник Народного комиссариата просвещения ССРБ*, Вып 11–12.
- Покровский, М.Н. (1923), *Дипломатия и войны царской России в XIX столетии: сборник статей*, Москва: Красная новь.
- Покровский, М.Н. (2011), *Историческая наука и борьба классов: Историографические очерки, критические статьи и заметки*, том 2, Издание 2-ое, Москва: Книжный дом «ЛИБРОКОМ».
- Покровский, Н.Н. (2009), “Вместо предисловия”, Покровский Н.И. *Кавказские войны и имамат Шамиля*, 2-ое изд., Москва: РОССПЭН.
- Редин, М. (1932), “М.Н. Покровский как историк колониальной и внешней политики самодержавия”, *Историк-марксист*, Т.3 (25).
- Рубинштейн, Н. (1924), “М.Н. Покровский—историк России”, *Под знаменем марксизма*, № 10–11.
- Сидорова, А.Л. (2003), “Духовный мир историков «старой школы»: Эмиграция внешняя и внутренняя. 1920-е годы”, Сахаров, А.Н. (отв. ред.) *История и историки 2003: Историографический вестник*, Москва: Наука.
- Скрябин, Г.К. (1986), “Выдающийся организатор науки”, Скрябин Г.К. (глав. ред.) *Сергей Федорович Ольденбург*, Москва: Наука.
- Сталин, И.В. (1951), “Марксизм и национальный вопрос”, *Сочинения*, Т.2, Москва: Государственное издательство политической литературы.
- Фирсов, Н.И. (1928), “Изучение Татарии в историческом, археологическом и этнографическом отделении”, *Новый восток*, № 20–21.
- Фридлянд, Ц. (1929), “О борьбе за марксистскую историческую науку в СССР”, *Под знаменем марксизма*, № 2–3.
- Шовкринский, Ю. (1932) “Об искажении ленинизма в вопросах истории Дагестана”, *Историк-марксист*. Т. 1-2 (23-24) .
- Юрганов, А.Л. (2011), *Русское национальное государство: Жизненный мир историков эпохи сталинизма*, Москва: Издательский центр Российского государственного гуманитарного университета.
- Яворский М.И. (1925), *Краткая история Украины*, Киев: Государственное издательство.